

海外の照明事務所で働く

Grenald Waldron Associates

目黒朋美さん

[Philadelphia, USA]



事務所にて Principal の Sandra さんと

映画ロッキーの駆け登った大階段がある。水面が視線に近い川が流れている。芝生が広がる公園が見える。大きな並木道を車で抜ける。これが、私の毎朝の通勤風景である。1年と3ヶ月前に日本に居た時とは打って変わったこの風景。私の勤めている照明デザイン事務所は米国フィラデルフィアというニューヨークから車で南に2時間、全米第5位の人口を持つ街を拠点としている。フィラデルフィアと言ってもピンと来ない方には映画「シックスセンス」や同じくブルースウィルス主演の「アンブレイカブル」そして「ロッキー」の舞台と言えは街のイメージが湧くだろうか。事務所は街から車で30分近く行った住宅地にあり、古い石造りの建物である。この建物と毎朝の風景が私はとても気に入っている。照明デザインの草創期を突っ走って来た Raymond Grenald が1968年に興した Grenald Waldron Associates (当時は Grenald Associates) は現在の社長である Lee Waldron を含め所員12名の事務所である。読者の皆さんが何に興味があるのか思いを巡らせつつも、コラムということなので徒然なるままに書かせて頂く。



Grenald Waldron Associates の皆さん

まず「日本とアメリカの事務所ではどんな点が大きく違うのだろうか」であろうか。私は2000年の7月までこの照明探偵団の協賛メーカーの一つでもある松下電工の照明デザイン担当部署にて件名の照明設計に携わってきた。つまり設計に落とし込む器具は分厚い見なれたカタログ数冊からか、あるいは特注器具のスケッチを描く。ここアメリカでは Many というよりは Huge と形容したほうがイメージをつかみ易いだろうか、おびただしいカタログが壁一面を覆っている(横10m縦2m)。事務所働き始めた当初はかたづけしからカタログに目を通し、どんな器具があるのかを見てみた。最近になり大体よく使われるカタログ及び器具があることが掴めてきた。その商品知識もまた照明デザイナーとしての素養の一つであることは間違いない。多くの照明メーカーが存在するという事は競争力を高め、また良い器具を生み出す原動力を生む。多くのメーカーが存在するが故、アメリカの照明業界にも、どこの会社かどこを買ったというような企業の買収と合併(M&A)が頻繁に起こっているようだ。

この良質な器具の日本市場への進出を阻んでいるのが、日本独自の電圧である100V/200Vという壁であろう。将来的には安定器やトランスがユニバーサルに電圧に対応し、アメリカの器具が日本市場でも容易に使える日が来るのではないだろうか(私の希望でもあるが)。勿論日本の各社メーカーもそれに応じて益々良い器具を創り出して行くという好循環も期待したい。

次に、照度計算についても便利なソフトが存在することを述べたい。北米照明学会によって統一されたフォーマットで作られた照明配光データが、各社の器具を同一空間上で用いた計算を可能にしている。日本の照明士クラスの知識と配光曲線等の数値データがあれば自分でもソフトを用いて配光データを作ることが可能である。また多くの照明メーカーのウェブサイトから配光データの取得が可能であるので非常に便利である。

また、事務所の手掛けた最近のプロジェクトの写真も掲載させて頂く。75周年を迎えたこの吊橋 Benjamin Franklin Bridge はその誕生日に音と光のショーを花火と共に披露した。フルカラーLED光源を用いているので多彩な演出が可能である。第2次世界大戦中に既に存在した大きな吊橋が最先端の器具で彩られ今直威厳ある姿を見せ、夜には美しさを増す。この姿を見ればアメリカに來ても照明に携われている事を嬉しく思う。現在事務所では米国の最高裁判所の照明やGAP系の仕事などが進行中である。

最後になったが、ニューヨークでの9月11日の悲劇からついに始まってしまった戦争の早い終息を望み、悲劇に巻き込まれた人々のご冥福を祈りたい。(目黒 朋美)



LEDを用いて演出された Benjamin Franklin Bridge

面出の探偵ノート

●第 27 号 2001 年 10 月 13 日 土曜日

マンハッタンを散歩していて・・・

ショッキングなテロ事件の起こる2週間ほど前の8月末に、久しぶりにビジネス・ストレスの少ない時間を NYC・マンハッタンで過ごしました。大学で教鞭をとる、これまた忙しい女房殿との久しぶりのバケーションで、街歩きを楽しんだのです。会社にはもちろん出張半分、と申告していましたが・・・。私たちはアッパーウエストの 80 丁目あたりにウイークリーのホテルをとり、近くの Zabers (ニューヨーカーの台所と言われる商品の豊富なフードショップ) でノルウェージャン・スモークサーモンを数種類買ってきて、焼きたてのベーグルに挟み、クリームチーズをたっぷり添えての、のんびりした朝食。昼ともなればきっちりした予定もたてずに、足の向いた美術館やソーホーのギャラリーを覗いたり、お茶したり、ショッピングをしたり・・・。何年ぶりかの「気ままな時間」をマンハッタンで過ごしたのです。私たちに、長く日本で暮らしていたアメリカ人の友人家族がいたのですが、2カ月ほど前に NY に転勤して帰国したばかりでした。私たちは、彼らの住まいを訪ねました。奥さんの Michele は日本美術史の研究者、旦那の Bill は Wall Street Journal の記者、Jackson は日本で育った4歳の長男、Adel は6月に生まれたばかりの美人の赤ちゃんです。この4人家族はテロ事件のあった World Trade Center(WTC) に近いウォール街に住んでいました。彼らの住まいはセキュリティのしっかりしたコンドミニアム。屋上に出ると目の前に WTC が見えました。私たちは夕食前に、子どもたちを2台のベビーカーに乗せて近くのバッテリーパークを散歩することにしました。マンハッタン島の最南端に行くと海も広々見えます。秋の訪れを予感させる爽やかな海風。パークはここから東側へ、WTC を取り囲むようにして、シーザベ

の方に伸びています。昔は治安の悪かったこの辺が、見事に住職混在型の高級住宅地になっていました。たくさんの市民が散歩をし、ジョギングやローラーブレードを楽しんでいます。ここから自由の女神を回る遊覧船も出ています。まるで NY 市民の典型的な豊かな生活を絵に描いたような環境の夕暮れです。西側クイーンズの方に茜雲が広がり、思わずカメラを構えたかと思うと、ハドソン川を越えたニュージャージーの空には、典型的なブルーモーメントが忍びよってきます。自由の女神がほほ笑みかける夕暮れでした。夕食は WTC のほぼ足元。カジュアルですがどれをとっても美味しいイタリアンレストラン。私たちにとっては親友との久しぶりの再開、楽しく心休まる一時でした。4歳の Jackson は私との玩具遊びが気に入ったらしく、次の朝に「Mende-san、次はいつ遊びに来るの?」という電話がかかってくるようになりました。暫く電話口で子どもとの会話を楽しみました。そんな思い出を残して帰国してから2週間後に、あの目の前にそびえていた WTC があっという間に視界から消えてしまったのですから、もうびっくり。直ぐに彼らの自宅に電話しましたが繋がりません。仕方なしに e-mail。それも数日間過ぎて返信なしです。心配しましたが他州に住むご両親の連絡先が見つかって、やっとお父さんが捕まり、彼ら全員の無事が確認できました。Bill は勤め先の World Financial Center にいて、爆風で窓が全部壊れたそうです。直ぐに会社を出て煙の中を家族が住むコンドミニアムに戻り、一家4人がタオル片手に East River Side を北へ北へと数時間歩いたそうです。おぞましい光景だったのでしょう。あの安らいだ夕暮れのバッテリーパークを取り戻すのに、これから何年掛かるのでしょうか。いや、もう NY の人々の心にはあの安らぎは永遠に戻らないのかも知れません。しかし、そのような悲惨な事件は今初めて地球上に起こったものではありません。アメリカ人にとって最大級に惨事は、これまで世界中に繰り広げられた多くの紛争や戦争の

名を借りて、半ば合法的に起こされてきました。真珠湾しかり、広島、長崎しかり、ベトナムや湾岸戦争しかりです。誰もこれらの大量虐殺の犯罪を総括し、きちんと謝罪していません。ですから WTC に始まる象徴的なテロ行為を、私たちは単純な報復などで済ませることは出来ません。この重苦しい出来事を契機に、世界中の不幸に目を向けるべきなのでしょう。紛争や戦争がなくとも、毎日たくさんの人々が飢餓と病で命を落としてもいるのですから・・・。今、Bangkok へ出張で向かう機内で書いています。探偵団通信の原稿としては、ずいぶん重たくなってしまいました。気分がそつちに行ってしまったものですから。たまには明るくない話題も大切に扱わなければなりません。私たちは世界中の文化の異なる友人と、照明文化についての言葉を交わす機会を持ちたいと思っています。言葉や、歴史や、宗教さえも異なる人たちが、それでも照明探偵団の視点に興味をもってくれています。震災の起きた神戸市も復興事業の一環として「こうべ照明探偵団」という名の活動を行いました。NYC にも近いうちに照明探偵団の支部が出来ることを期待しています。世界中の不幸は容易になくなりませんが、芸術や文化の交流は、私たちの心の不幸を救う役割も果たします。明るいことは元気のもとですが、暗さを直視し、影を大切にすることも、探偵団の心構えかと思えます。ずいぶん文章が長くなってしまいました。短く書くのは難しいよね。

(面出 薫)

「横浜みなとみらい編」

2001年10月01日

報告

この日はひどく雨が降っていたうえ風も吹いていたのでカメラを濡らさないように写真をとるのに団員の方々が非常に苦労していました。

桜木町駅に集まりさっそく汽車道に向かいました。この場所はランドマークタワー・大観覧車など横浜の主要なあかりのランドスケープを眺めることができるスポットです。しかしながら反対側はさびしい工場などが並んでいて取り残されたように見えます。(現在計画中のようですが)

また、この歩道には通常の水平面照度を保つ街路灯はなく、両脇に足元を照らす光が連続して設置されていて歩行者をやさしく誘導していました。最初のうちは温かみある光色であったのに途中から色温度の高い白い色になってしまいました。

このようなところには現在ある日本の計画の限界がかいまみえてしまったかのようで少し残念な気がしました。

横浜トリエンナーレにおいてはオノヨーコさんの光のアートを観ました。

かなり遠くからも天をさす青い光はみえます。本体は古い貨物列車でできています。近づくセンサーによって、おどろおどろしい曲が流れてきて、チョット笑いがこぼれました。車体に無数にあげられた穴からの光はプラネタリウムの星のようにみえます。聞けばこの穴は本物の銃弾によってあげられたものなのです。

戦争の傷跡を表現したシンボリックな光。それを知ったときオノさんの平和への願いをはじめて感じる事ができました。



▲横浜トリエンナーレの紹介ページ
http://www.jpff.go.jp/yt2001/



(上) オノ・ヨーコ「貨物車」



(下) 草間彌生「ナルシスの庭」

後半は税関などの威厳のある古建築のライトアップを眺めながら中華街へと向かいました。海岸沿いの街として東京幕張よりも横浜のほうが、親しみがあり心地いいという人がいます。今回、街歩きに参加してなるほどと思いました。

横浜には歴史がある。横浜という都市は開発と同時に古い建築を大切に保存する計画を長く行ってきたという過程があり、そのことが美しい都市環境をつくっているということであらためて実感しました。

(井上大地)

報告

今回の街歩きは、港町横浜・桜木町の調査を激しい雨の中決行しました。桜木町駅から汽車道を抜け赤レンガ倉庫に向かい、そこから関内方面に下り神奈川県庁や開港記念会館などを通って中華街へ…といったシナリオです。

案の定調査は風雨に伴い難航。しかし深い霧のような雨景色の夜景に魅了され、団員たちは苦戦しながらも、しきりにシャッターを切っていました。なぜなら、この雨でランドマークタワーなどビル群から発せられる蛍光灯の明かりが、気中の水しぶきにより乱反射され、あたかも空気が発光しているような幻想的な光景を作っていたからです。

桜木町駅周辺とは対照的に、汽車道に入ると歩道が主体なゆえ光は低い位置に集められ、夜景を眺望するに適した光環境を配慮しているように思えます。

しかし残念なことに、足下灯や拡散光を発するポラードなどとの色温度差や多種照明器具の総合性などは照明設計に盛り込まれていなかったようです。

赤レンガ倉庫や開港記念会館などレンガを使用した洋式建築には色温度の低い高圧ナトリウムなどの光源で投光し、レンガの色を

際立たせるような配慮がなされていました。しかし、街路灯のような白色の光源との色温度の差が目立ち、特に開港記念会館正面の街灯は一際目立ってしまっていました。

何はともあれ、横浜市は、桜木町周辺開発の計画段階から都市の光環境に配慮し、都市の夜景や歴史的建造物に対して、他に先駆け明確な照明計画を練り実行に試みた功績は、特筆するべきものがあると思います。

今回の街歩きで、個々の建築だけではなくさらに視野を広げたスケールで、照明が持つ都市景観への影響力を少なからず感じられたと思われます。

▼中華街にて集合写真



(上) 横浜クイーンズスクエア
(下) 汽車道

第15回研究会サロン

【横浜みなとみらい調査報告 / art-Link 上野 - 谷中調査報告】

2001年10月05日

少し日が短く感じられるようになったと思ったら外はすっかり秋の気配。今回のサロンは「芸術の秋」をテーマに行なわれた2つの調査報告と団員による活動の報告が行なわれました。

まず、10月1日に実施された横浜みなとみらいの街歩き調査報告が行なわれました。

当日はあいにくどしゃぶりの雨でカメラや計測機器の使用もままならない様子でしたが、雨の中で撮影したみなとみらいの夜景はまた一味ちがう雰囲気。いつもの道路も路面が濡れて車のライトを映し込んでいたり、高層ビルの頂部が霧に包まれていたりと幻想的でした（※8ページに関連記事が掲載されています）。

面出団長曰く、「横浜は夜間計画を積極的に計画していて、実際自動車道などはなかなか良い計画がされているけれどまだ課題は残されている。多くの照明デザイナーが夜間計画に携わっているが、照明計画は平面図上で見るものと人間が実際に立った視線でパースペクティブに見るのでは全く見え方が違うのだから、もっと計画時に実際に歩いたような気分で立面の見え方を重視しなければならぬ」とか。

ウォーターフロントの計画は、たとえばパリのセーヌ川河畔などは川に向かっての見え方を重視した計画がなされているけれど、東京の隅田川は逆に川に背を向けた状態で計画がすすんでしまったため、今になって親水公園を計画してもなかなか面白くないのだそうです。

横浜の夜景も水際の景色を見て楽しめるような計画にすればもっと楽しくなるのでは、とのことでした。

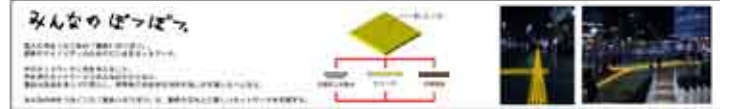
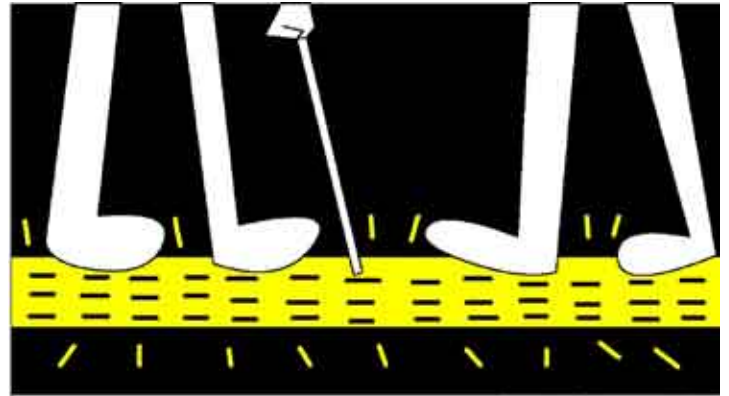


▲ art-Link 上野 - 谷中のサイトマップ
<http://artlink2001.tripod.com/>



▲和田みつひと
「光のかたち」公園灯プロジェクト

研究会倶楽部活動2 - 研究会サロン



▲出中団員作品「みんなのぼつぼつ。」
▼プレゼンテーションの様子



続いてアートフェスティバル「art-Link 上野 - 谷中 2001」の調査報告が行なわれました。「art-Link 上野 - 谷中」は、1997年にスタートしてから今年の秋で5回目を迎え、すっかり上野の秋のイベントとして定着してきました。照明探偵団では『art-Link98「照明探偵団 谷中に現る」』でご存知の方も多しはず。今回調査に行ったのは上野の森美術館の参加企画「和田みつひと〈光のかたち〉公園灯プロジェクト」です。

場所そのものを作品化していく和田さんは、今回上野公園内の公園灯8本を使って光のインスタレーションを行なっていました。既存のポール灯のガラス面に黄色の透明シートを貼って風景を変貌させるというもので、またそのポール灯が上野駅から公園を訪れる動線上に位置していることから突然目に飛び込んでくるようになっていきます。

薄暗い公園の中で生い茂る木々の間から漏れる黄色い光は、ついそちらに足を運んでみたくなるような雰囲気。主張しすぎることなく「あ、そういうばこんなところに公園灯があったんだな」と思い出させられるような、そんな光のはたらきかけを感じたのでした。

最後はヒカリモノの紹介で、今回は探偵団倶楽部団員の田中盛志さんの作品が発表されました。

コイズミ国際学生照明デザインコンペにおいて佳作を受賞した「みんなのぼつぼつ。」という作品で、視覚障害者のための黄色いサインブロックを光らせるという斬新なものでした。

使用した材料のサンプルや、他の入選作品の紹介なども併せて行なわれ、関心をもった人たちの質問も多く寄せられました。こういった作品や気になるものを持ち寄って皆で話し合うとやっぱり盛り上がりやすいですね。

また、今回のサロンには遠く神戸で照明探偵活動を行なっている方2名が参加してくださいました。神戸といえば夜景の美しい街。阪神大震災がきっかけとなって自分たちの街を復興させようと発足し、現在総勢約100名と盛り上がりつつあります。

独自に制作したパンフレットにはきれいな神戸の夜景の写真が盛りだくさん。これらの写真もプロの写真家によるものではなく、自分たちで好きなスポットの写真を撮って持ち寄ったのだそうです。

今後も活動内容を報告してもらえると嬉しいですね（※4-5ページに関連記事が記載されています）。
（橋本 八栄子）

TBS 「はなまるマーケット」で “ライトアップゲリラ”が出題！

2001年9月26

9月26日（水）のTBS「はなまるマーケット」ママダスコーナーで照明探偵団活動のひとつであるライトアップゲリラが問題として出題されました。「次のうちで、照明探偵団が実際に行っている活動はどれでしょう？」という問題で、①出張お助けライト②明るいコンサート③突然ライトアップ④インスタント日光浴、からゲストの皆さんが正解だと思うものをひとつ選ぶ、というものでした。もちろん正解は③。以前に品川で行われたライトアップゲリラの様子が銭湯や川のライトアップの写真を使って紹介されました。



★★★投稿規定★★★

照明探偵団通信 vol.12（次号）の原稿を募集しています。独自の照明探偵レポート、光に思う今日の日本、照明について知りたいこと、疑問に思っていることなどなど、テーマは何でも結構です。日頃ひかり、あかりなどについて思っていることや様々なレポートを照明探偵団通信に発表してみませんか。原稿の送付方法は、

- 原稿をテキスト形式で保存したフロッピーを送付
- e-mailで送付

（メール上記述でも原稿テキストファイル添付でもOK）

- FAXで送付 ●郵送で送付

のいずれかをお願いいたします。また、このほかの送付方法をお考えの方は、事務局までご相談ください。投稿お待ちしております！

照明探偵団・事務局
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-28-10 ライティングプランナーズアソシエーツ内
TEL：03-5469-1022 FAX：03-5469-1023

【照明探偵団の活動は以下の23社にご協賛いただいております。】

ルートロンスカ株式会社 岩崎電気株式会社 松下電工株式会社 東芝ライテック株式会社 小糸工業株式会社 三菱レイヨン株式会社
ヤマギワ株式会社 株式会社ウシオスペックス 山田照明株式会社 マックスレイ株式会社 オーデリック株式会社 ニッポ電機株式会社
株式会社エルコ・トートー 株式会社ウシオユーテック 日本フィリップス株式会社 小泉産業株式会社 株式会社遠藤照明
三菱電機照明株式会社 大光電機株式会社 湘南工作販売株式会社 金門電気株式会社 ヨシモトポール株式会社 日本電池株式会社

照明探偵団日記

2001年9月11日、この日が歴史に恐ろしく悲しい一日として記録されることになりました。長い間NYマンハッタンのシンボルであったワールドトレードセンターをはじめ、アメリカ各地がテロの攻撃に遭い、たくさんの尊い命が失われました。

照明デザインの分野でも先駆者的な役割を果たしてきた街、NY。その街の景色が一瞬にして変化し、人々がパニック状態に陥っている光景は見るに堪えられないものでした。

NYの街では教会で、公園で、そしてそれぞれの家庭で追悼の光としてろうそくのあかりが灯されている様子が報道されていました。闇にゆらめく暖かいろうそくの炎は不思議と人の心を落ち着ける効果があります。瞬時にして大切な人を失った人々の心が元の状態に戻るまでには長い時間を要することでしょう。小さなあかりが少しでも人々の心を癒し、明日への生きる希望を思い出させてくれれば、と思います。

亡くなった方々のご冥福と世界平和を祈って・・・（田沼彩子）